

## 研究チーム No. 143 「文化の継承と日本語教育」 中間報告

研究チーム代表者 : トーマス・M・マック

本研究は、大きく 4 つの研究部門から構成されている。以下に各研究部門の現在までの成果について報告する。

### ①日本語学習教材の中での「文化」の扱い方についての研究

現在、初中級レベルの日本語学習教材開発と作成、および試験的な実践活動を通して日本文化に関連する材料の種別を吟味し、教材への取り込み方を検討している。この研究の成果物を教材とした学習活動を通して日本語教育における文化に関わる教育のあり方を考察している。

### ②日本国内外における日本の伝統文化の普及活動と日本語教育との関連についての調査・研究

日本国内では、本学にて日本語教師向けワークショップ（茶道／能楽）を実施した。これに先駆けて講師の古儀茶道藪内流随竹庵七世・福田竹弑氏、能楽観世流シテ方・上田宜照氏を対象に非構造化インタビュー調査を行い、両氏が継承する伝統文化についての「思い」や世界に向けて伝えようとするメッセージ等を確認し、それを日本語教育の目指すところに沿わせて有意義に活かしようか、その可能性について考察した（森川結花 2019 「日本語教育における伝統文化をテーマとした異文化理解プログラム開発の可能性」 甲南大学教育学習支援センター紀要第 4 号、pp53-64）。また、ワークショップ参加者を対象に日本語教育の現状に関するアンケート調査を行った。以上の成果を踏まえ、2019 年度は日本語教師と留学生向けのワークショップを行い、教師と留学生に及ぼす文化体験活動の効果についてさらに分析を深める予定である。

日本国外では、米国アリゾナ州とオハイオ州において日本文化の体験活動の実践とそれを通じた調査活動を行っている。アリゾナでは、アリゾナ大学日本語プログラムの活動の一環として新たな文化体験イベントを企画・実施し、また大学内や地域コミュニティにおいて行われている日本文化関連の催しについての現地調査を行なった。アンケートを用いて参加学生の催しや催しに関連した日本文化・日本語学習についての考えを調査した。オハイオでも、日本語プログラムの一環としてプログラム内及び地域の日本人コミュニティとの関わりを持った複数の文化体験イベントを実施した。二つの異なる地域や大学の特徴の違いが催される文化体験イベントに影響しているようで、今後の調査研究の課題の一つとなるであろう。

### ③日本の歴史と古典文学の研究

現状では日本語教育の中では日本史や古典文学の扱いは任意であり、教師の知識も常識

程度のものでよしとされている。しかし、本研究では、言語教育の背景には当該言語を使う人々の文化的背景を理解することも大切であり、伝統文化の理解を踏まえた国際交流の進展には正確な歴史理解が重要であると考えます。

日本の歴史を学習者にリアルに感じ学ばせる学習テーマの一例として、本研究は「京都」をとりあげる。京都は日本の伝統文化を代表する都市として国内外の人々に知られている。しかし京都もまた歴史的な変遷を経て現在の姿になったのであり、現在の京都を千年の都と呼んで平安京の昔を投影することは、誤っている。そこで留学生が日本文化を理解する学習で使えるような、京都御苑（京都御所）の歴史を紹介するパンフレット（もしくはスライド）を準備している。

また、日本の古典文学については『万葉集』を中心とした日本上代文学の研究成果を日本語教育につなげる糸口を探るべく、柿本人麻呂・大伴旅人・山上憶良・大伴家持たちの作品の構成と表現の機能を分析している。神戸に1300年間も定着している「菟原娘子伝説」を研究し、著書も刊行している。

#### ④日本語学習者自身の内省による日本文化の捉え方や異文化摩擦経験に関する調査・研究

本学 Year-in-Japan プログラムの修了生や日本在住外国人など、日本語学習歴が長く日本語レベルも上級から超級に達している学習者を対象に非構造化インタビューを行い、自身の日本語上達と日本文化理解とがどのような関係にあったかを内省していくことで、実際の学習効果を明らかにしていきたい。このプロジェクトは本研究の研究期間第2年目の課題である。（1,649字）